

はじめに

日本は世界で最も高齢化の進んだ国である。平成 19 年には、65 歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）の割合が 21%を超えて、世界で最初に「超高齢社会」が到来している。その後も高齢者の割合は増え続け、平成 26 年には 26.0%となり、実に日本の人口の 4 人に 1 人以上が高齢者となっている。

高齢化の進展について、本県も決して例外ではなく、全国的にはその進展は遅い方であるが、平成 24 年にはその割合が 21.3%（国は 24.1%）となり、21%を超えて「超高齢社会」を迎えている。そして、平成 27 年版高齢社会白書（内閣府）によると、平成 52 年には 32.4%まで上昇し、およそ 3 人に 1 人が高齢者となると予測されている。

本来、長寿というのは人類の永年にわたる夢である。医療技術の飛躍的な進歩や社会、経済の発展など様々な要因により、これを実現した社会は人々が待ち望んだ社会であり、長寿社会の到来は誇るべきものであるはずのものである。しかしながら、それが「課題」として捉えられる背景には、高齢者に対して、「既に役割を終え、社会から支えられる者である」という固定観念があることが理由の一つであると考えられる。

しかし、私たちの周囲を見ても、非常に多くの健康な高齢者がいる。実際に本県の「健康寿命」（平成 22 年）は男性が 71.74 年で全国 1 位、女性は 74.93 年で全国 3 位となっており、日常生活を送るのに特段支障のない「健康長寿高齢者」は、65 歳以上の高齢者の 83.7%にのぼる。

また、高齢者にはこれまで培ってきた知恵と経験という何物にも代え難い貴重な財産がある。超高齢社会における最大の財産は高齢者自身であり、高齢者はそれぐらい大きな潜在能力を有している。こうした見方を持てば、超高齢社会に対する印象が大きく変わってくるはずである。

世界的にも例を見ない、いまだかつて誰も経験したことのない超高齢社会において、人々が世代を超えて、ともに豊かに生きるためには、生涯学習の視点からどのようなアプローチができるのか。長寿を感謝し、与えられた時間をどのように使うかは各個人の自由であるが、様々な活動を通じて、社会に参画していきたいと思う人が少なからず存在している。

本報告書は、そうした人々のニーズに応え、社会参画に繋げていくにはどのようにすれば良いのか、これまでの地縁・血縁的なつながりから、地縁・血縁にとどまらない新たなつながりやコミュニティを創り出し、社会的に拓げていくにはどのようなことが必要であるのか、高齢者だけでなく、あらゆる世代の人々が豊かな超高齢社会を迎えることができるよう、愛知県生涯学習審議会で審議し、その結果を取りまとめたものである。